

修士学位論文要旨

(通信制)保健科学研究科

学生番号 M971004

氏名 森元大樹

回復期リハビリテーション病棟における脳卒中患者の転倒リスクが在宅生活での作業遂行と健康関連 QOL に及ぼす影響

【背景と目的】脳卒中患者において回復期リハビリテーション病棟（以下、回復期病棟）では転倒が重大な問題となっており、活動性向上と転倒防止を両立させるためには、転倒要因の把握とその対策が重要な課題である。また、転倒リスクが高い者は、在宅生活において単に転倒しやすいだけでなく、その人にとっての意味のある作業の遂行に影響する恐れがあり、生活の質（Quality of life：以下、QOL）への影響を防ぐことが求められる。しかし、内外の文献を概観しても、その関連を検討した研究はほとんどみあたらない。そこで、回復期病棟から自宅退院した脳卒中患者を対象に追跡調査を実施し、入院中の転倒リスクが在宅生活での作業遂行と健康関連 QOL に及ぼす影響について検討することを研究目的とした。

【対象と方法】対象は平成 23 年 5 月から 10 月までの 6 か月間に、リハビリテーション専門病院の回復期病棟から自宅退院した 55 歳以上の脳卒中患者で、本研究の主旨と協力内容を理解して同意し追跡調査が可能であった 75 名とした。

方法はまず、電子カルテシステムを使用し、対象候補者の選定を行った。次に入院中の診療記録から属性および文献レビューから得られた転倒関連要因を収集した。転倒リスクは中川らの転倒リスクアセスメントシートを用いた。在宅生活での作業遂行はカナダ作業遂行測定に準じた半構成的インタビューを実施した。回答者の負担軽減とデータ収集を容易にするため、対象者が特に重要だと考える 3 つ以内の作業について退院時に面接し、退院 1 ヶ月経過後に電話面接にてそれらの作業の遂行度と満足度を 10 段階で自己評価してもらい、面接の結果から遂行度スコアと満足度スコアを算出した。健康関連 QOL は MOS Short-Form 36-Item Health Survey version 2（以下、SF-36v2）を用い、退院 1 ヶ月経過後に郵送し、返送された調査用紙から回答データを収集した。

分析方法は、転倒スコアから、対象者をリスク 1 群、リスク 2 群、リスク 3 群に分類した。また、転倒スコアの平均値と標準偏差を転倒リスク別に求めた。対象者の属性および転倒関連要因に関してリスク別にクロス集計を行い、特性を検討した。次に、本人の退院後に実施したい、希望する作業について、作業の総数、該当する作業遂行領域（セルフケア・レジャ

一・生産的活動)の数を転倒リスク別に検討した。同様に、退院後の作業遂行における遂行度および満足度、SF-36v2で得られた8下位尺度およびサマリースコアについても、リスク別に検討した。また、作業遂行と健康関連QOLに影響を及ぼす転倒関連要因を検討した。なお、全ての統計解析は、IBM SPSS Statistics 20 for Mac OSXを用い、有意水準を5%未満とした。本研究計画は、平成23年5月9日に湯布院厚生年金病院倫理委員会の承認を得た(受理番号33)。

【結果】対象者の転倒スコアは平均 4.7 ± 2.1 で、転倒リスクを分類すると、リスク1は27名、リスク2は32名、リスク3は16名であった。転倒関連要因17項目のうち8項目でリスク別に有意差が認められた。退院後の作業遂行において、作業の総数は1人平均2.2個であり、遂行度スコアの平均は6.1、満足度スコアの平均は6.1、生産活動の数、遂行度スコア、満足度スコアがリスク別による有意差を認め、高リスクなほどスコアは低くなった。また、遂行度スコア、満足度スコアは、転倒スコアと有意な弱い相関が認められた。退院後の健康関連QOLにおいて、転倒リスク別の8下位領域スコアで有意差を認めた項目は、身体機能、日常役割機能(身体)、社会生活機能の3項目であり、高リスクなほどスコアは低くなった。3サマリースコアで有意差を認めた項目は、身体的健康と役割/社会的健康であり、高リスクなほどスコアは低くなった。精神的健康は有意差を認めなかった。また、転倒スコアと身体的健康は有意な相関、役割/社会的健康は有意な弱い相関が認められた。作業遂行の遂行度スコアを従属変数とした重回帰分析では、HDS-R22点以下、入院中の転倒回数の2変数の影響が示され、満足度スコアを従属変数とした場合はHDS-R22点以下の1変数の影響が示された。SF-36v2のPCSを従属変数とした重回帰分析では、車椅子の使用、入院期間の2変数の影響が示され、RCSを従属変数とした場合は、身体抑制、高次脳機能障害の2変数の影響が示された。

【考察】結果から、退院後の作業遂行を高めるためには、知的活動を高めつつ、入院中の転倒回数を可能な限り減少させるアプローチが有効な可能性が考えられる。また、回復期病棟での転倒防止対策として、安易に車椅子を使用せずに入院を長期化させないことが、退院後の身体的健康の低下を防ぐことに有効であると考えられる。そして、転倒への対策で身体抑制をできるだけ行わないように関わることで、高次脳機能障害の影響に十分な配慮をすることが役割/社会的健康の低下を防ぐ可能性があると考えられる。以上のことから、対象者の作業遂行の満足度に対する知的機能の影響、健康関連QOLの身体的健康に対する車椅子の使用と入院期間の影響が明らかとなり、回復期病棟における脳卒中患者の転倒リスクが在宅生活での作業遂行と健康関連QOLに及ぼす影響が具体的に示された。

Key words:脳卒中, 転倒リスク, 作業遂行, 健康関連 QOL